中原　泉
一枚の写真⑦

マンチェスター大学のプロポーズ

約束の時間に早すぎたので，私はホテルのロビーで待っていた。1987年（昭和62年）３月，IADR 開催中のシカゴである。Dick（ミシガン大学のクリスチャンセン歯学部長）が，ぜひ会わせたい人がいると言う。所在なげに立っていると，東洋人は私だけだったので，長身の西洋人が「Dr. ナカハラ？」とにこやかに握手を求めてきた。

彼は，マンチェスター大学の J.H. ジョーンズと自己紹介した。渡された名刺には，Councilor とあった。やわらかな物腰，端正な風格，明快な語り口，これぞ英国紳士であった。じきに Dick，小倉英夫助教授（当時）がみえ，４人でソファを囲んだ。

ひとしきり歓談のあと，前歯学部長という Dr. ジョーンズが，貴学と姉妹校の提携をしたい，とまことに率直に申し入れた。その出し抜けのプロポーズに戸惑って，私たちは即答を避けた。

あとで知ったのだが，英国では President を Councilor という。マンチェスター大学の学長のプロポーズと知っていたら，否応もなかったろう。マンチェスター大学は，イギリスの北イングランドの名門校で，歯学部はとくに基礎歯科医学の研究に優れ，当時，「イギリスにおける最高の研究能力を有する歯学部」として認定されていた。

私たち一行４名は，５講座ほどの教授から，30分ずつ丁寧に研究の概説をうけた。私には専門的すぎたが，彼らの研究に対する熱意と自信，そのレベルの高さは十分に理解できた。私がこのようなレクチャアをうけたのは，他にはスイスのチューリッヒ大学だけである。

同年10月15日，市内のマンチェスター市迎賓館の「ブルームクロフト・ハウス」。晩餐のあと，瀟洒なゲストルームにおいて，私たちは姉妹校提携の調印をした。写真は，中央がジョーンズ学長，その左隣にＰ・Ｊ・ホロウェイ歯学部長，左側は小倉助教授。格式ばらず，まことに和やかでフランクな洗練されたセレモニーであった。これが英国流か，と私は感服した。

翌日，地元のマンチェスター新聞の取材をうけた。調印書を胸にして笑え，といわれて，私は大人気なく愚図った。撮影しながら記者が，マンチェスターの名物は何か知っているかと問う。私たちは口をそろえて，「産業革命！」と答えた。

すると彼はニヤリとして，もう一つあると言う。答えに窮していると，「マンチェスターユナイテッドだよ」と得意気に鼻を鳴らした。当時はまだ日本ではマイナーだったが，サッカーかぁと合槌を打った。後年，あのベッカムが出た名門クラブである。

その夜，ホロウェイ歯学部長邸に招かれた。夕宴のあと，暖炉のある居間でくつろいだ。小倉助教授が，折目正しいホロウェイ夫人と談笑をはじめた。宗教の話だったので，私は内心マズイなあと思った。異国人との宗教談義は禁物，と教えてくれたのは小倉助教授だ。その議論は白熱し，両者は一歩も引かないディベートになった。明らかに夫人は，怒り心頭に達していた。オイオイ OGURA 君と，私は日本語で小声でたしなめた。招待された先の御夫人を怒らせることはないだろう，小倉！

彼は，べつに悪びれた風もなくケロリとしている。御主人が，裏で夫人をなだめている様子だった。彼女はなんとか玄関まで見送ってくださったが，別れぎわにも固い表情をくずさなかった。

小倉助教授の歯科界随一の語学力を証明する一場面であったが，そのせいで（と私は思っている），招待してもホロウェイ夫妻が来日することはなかった。翌年７月，私たちはジョーンズ夫妻を迎えた。